

月刊やちまなこ

2016.2.15 発行

No. 219

2 月号

釧路湿原国立公園 塘路湖エコミュージアムセンター（あるこっと）だより



湿原散歩

陽射しを受け、白く輝く湿原に汽笛が響いた。冬の観光列車「SL冬の湿原号」には海外を含め、多くの乗客が車窓の景色を満喫している。運行日数や区間も短縮され、1両のSLを駆使するのは何かと大変だろうが、来年も是非、釧路湿原を走る姿を見せてほしい。



コッタロ川と湿原のほとりから

188 如月のコッタロ湿原便り

コッタロ在住・中本 アキ子(文) 中本 民三(写真)

“日脚伸びコッタロ2川解氷す”。このところ日中の気温上昇(+3~5℃)による雪解けで、全面結氷していた小川も流れ出し、春はすぐそこまで来ているようです。

“薄氷け破り丹頂子別れす”。丹頂双家族のうち、第2コツ&タロの番が無事に子別れを完了したのは10日、15:30丁度でした。一羽の幼鳥も欠けること無く、そつのない子育てぶりに感服すると共に野生の不思議、素晴らしき第六勘に思わず知らず“万才!!”を叫んでしまいました。一方、これよりひと月遅れで産卵した第1コツ&タロー家は相も変わらず庭のツル池を畴とし、親子4羽のまましばらく子別れには時間がかかりましようね。“丹頂の子別れ惜しむ二月哉”。

ところで、一旦我家から離れていたエゾ狸の面々が再び姿を現して居つくようになり、御来訪の客人方を喜ばせている面白い場面の一つ一つを御覧下さい。“標札に化けて狸の日向ぼこ”は、玄関に置き物の如く佇んでいて時折うつらうつら。又“雪化粧こらし狸のランデブー”は仲良しひっそりグルーミングしたり、池のほとりで丹頂等をお騒がせしたり、と、なかなかの演技派でしょう？

さて、今季特筆すべきは、全く久方ぶりの再会でシャッターチャンスに恵まれた“12年ぶりのイイズナ冬毛色”で、驚き、あわて乍らも、どうにかこうにかパチリ！足跡だけは毎年々々新雪の上に確認するものの、いつも歯がゆい思いばかりさせられていたこの小さなすぐれものは、ネズミ捕りの神様なのです。何しろ野鳥のエサ箱に張り詰めた脂身には3~4匹のネズミが常駐していたのですから。それを2004年2月7日以来の登場で1月27日からピシャリと断ち切ってくれたネズミの害に感謝しなければなりません。



今年の干支にちなみ、和名に猿の字が付く鳥「紅猿子」を紹介します。ベニマシコは釧路湿原にやってくる夏鳥です。赤を意味する「猿子」と紅の重ね付けの名前からどれほど赤い鳥なのかと思いますが、鮮やかな赤い羽があるのは夏羽の雄だけで、雌はベージュ色の地味な色合いです。草やぶで小さな草の実や芽を食べます。フィフィやピッポピッポという鳴き声を覚えておくと、一部越冬組がいるので、冬にも見られるかもしれません。



スノーシューで湖畔散策を楽しみました

13日に自然ふれあい行事「冬の塘路湖畔散策」をセンター指導員牛崎の案内で行いました。季節外れの暖かさとなり気温が上昇、スタート時の外気温はなんと+6℃。雪解けが進みスノーシューが意外と沈む状態でしたが、季節限定のコースで散策を楽しみました。参加者が「足跡をたどれば居場所がわかりそうですね」というほど沢山あったのはエゾユキウサギの足跡で、人知れず活動する姿を想像しました。巢の発見から25年目のアオサギコロニー内は倒木が多く、参加者はコロニーの様子を目に焼き付けていました。殖民軌道阿歴内線跡ではシマエナガとカラ類に囲まれ、しばし野鳥観察。その後謀TV番組風に地域の歴史と人の暮らしに迫ってみました。湖上に出るとSLの汽笛が聞こえ、湿原を飛ぶタンチョウを遠目に見ることができました。



つぼっちの塘路湖周辺うろうろ日記 Vol.85「冬ならではの塘路湖散策」

冬の塘路のアクティビティと言えばワカサギ釣りがありますが、他にも普段いけないような場所をスノーシューなどで散策する事も楽しい体験です。今年の冬は穏やかな日が多く、先日元村キャンプ場より塘路湖を横断し、ワッカオイの岬へ行き、湖岸沿いに岬を探して歩きました。実は塘路湖にはワッカオイ以外にも様々な岬があります。

塘路湖岸には昔からアイヌの人々が住みコタンがありましたが、明治以降、入植者たちが塘路に来て混在していった後も、アイヌの人和人問わず漁師たちは湖岸に居を構え暮らしました。湖に生きる人たちは目印として塘路湖の岬に様々な名前を付けました。北岸のワッカオイ(=湧水の間)、南岸のオンネムシ(=親の所(入江))、ポンオンネムシ(子の所(入江))は、アイヌ語地名の岬で古い時代から使われていたのでしょうか。一方で南岸には柵割岬、鉄砲岬、村田の岬などがあり、明治大正以降につけられた岬の名前です。これらの岬は、地元でも60代以上の人でなければ中々知っている人がおらず、また通称だった事から記録もまちまちです。私にとって岬の場所確認は、塘路湖が凍結した冬の恒例行事になっています。

坪岡 始(標茶町郷土館学芸員)



